

学位論文審査の要旨

学位申請者	滑川 恵理子 【比較社会文化学専攻 平成18年度生】 平成28年度再入学	要 旨
論文題目	言語少数派の子どもの生活体験を基盤とする概念発達の様相-二言語使用学習のヴィゴツキー理論に基づく分析-	<p>本研究は、言語少数派の子どもの生活体験を基盤とする概念発達（生活体験と抽象概念が統合される中で概念が広がっていく過程）の様相を、発達の最近接領域（ヴィゴツキー）におけることばのやり取りに注視しながら分析し、得られた知見と示唆を教育現場に提供することを目的としている。</p> <p>論文は、家族の仕事に関わる生活体験および子どもの日本の学校での体験に着目した研究1、子どもの故郷での体験を基盤に作文を書く過程における、子どもと支援者のやり取りに着目した研究2、親子に共通する生活体験に着目した研究3で構成される。分析の結果、言語的・文化的隔たりを縮めるとともに、表面的な理解ではない、生活体験に根差した「身をもった概念理解」が示された。その過程では、子どもがもともともっていた概念が他者とのやり取りによって変化し広がっていくという概念発達の様相が可視化された。これらから、教育現場では子どもに抽象概念をより早くより多く理解させることが成果だと考えがちだが、抽象概念の発達を急がせることなく、まず心豊かな生活体験を積むことが発達の基盤を創ると結論付けている。</p> <p>第一回審査会では、言語少数派の子どもの生活体験を基盤とする概念発達の様相が説得力のある記述によって論述されている点、言語少数派の子どもの教育における新たなパラダイムを提示している点、理論に基づき体系的な議論がされている点などが高く評価された。しかし、あいまいな記述があること、先行研究の理解に不十分な点があることなどが、改善すべき事項として指摘された。申請者がこれらの要求に十分に答えた修正版を作成したことを確認した後、最終審査に進むことを決定した。公開発表会では重要な点を簡潔にまとめた分かりやすい発表を行い、参加者や審査委員の質問にも真摯な姿勢で的確に応答した。以上によって審査委員会は、博士（人文科学）(Ph.D.in Applied Linguistics) の学位授与に相当すると判断し、合格とした。</p>
審査委員	(主査) 教授 佐々木 泰子 教授 加賀美 常美代 准教授 西川 朋美 教授 森山 新 助教 本林 響子	
インターネット公表	○ 学位論文の全文公表の可否（ 可 ・ 否 ） ○ 「否」の場合の理由 ア. 当該論文に立体形状による表現を含む イ. 著作権や個人情報に係る制約がある ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている ※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について	